


イースターおめでとうございます。今年もこのようにして、主イエスの復活を記念し、ともに礼拝できる恵みを主に感謝しています。イースターといえば、「ウサギ」や「たまご」といったものが、シンボルとして多く使われますので、一般的には、そちらの方が、主の復活よりも、より関心がもたれているような気がします。そういうこともあって、教会では、主イエスの復活について、また何よりも、その復活の前の出来事、つまり、主の十字架について毎週語られる必要を強く感じています。なぜなら、主の十字架と復活こそが、すべての人が抱える、罪と死の問題に対する答えを与えてくれるもの、つまり、福音（良い知らせ）だからです。

通常、クリスマスやイースターの時には、それにちなんだ箇所からメッセージが語られることが多いのですが、今年は、これまでの続きから見ていきます。すでに読んでいただいたところからわかるように、ここには、パウロの宣教旅行（第三回）の続きが記されています。前回の箇所で、パウロは、御霊によってエペソからマケドニヤとアカヤに行き、そこからエルサレムを経て、ローマに行くことを示されましたが、今日は、彼がギリシャに行った後、エルサレムに行く途中、エペソの近くの町ミレトまで来たことを見ます。

 前の地図を見て下さい。エペソの左、エーゲ海を渡ったところが、マケドニヤとアカヤです。今のギリシャにあたりますが、パウロはまずマケドニヤに行き、そのの兄弟たちを励ましてから、南のアカヤに行きます。そこで三ヶ月を過ごすのです。この時彼は、アテネも訪問したと思いますが、その多くはコリントで過ごしたと考えられています。というのも、彼の書いたコリント人への手紙からもわかるように、そこにはさまざまな問題ありましたが、また彼は、そこでローマ人への手紙を書いたとも考えられているからです。

その後、パウロは、シリアに向けて船出しようとしています。でも、そこで彼に対してユダヤ人の陰謀があることを知るのです。以前コリントにおいて、神様は「恐れなくて語り続けなさい。わたしがあなたとともにいる。ここにはわたしの民が大ぜいいるから」と、パウロを励ますことで、彼は一年半、そこに腰を据えてみことばを語りました。ところが、彼がコリントを去る前に、ユダヤ人たちは、こぞって彼に反抗し、彼を法廷に引っ張っていったのです。その時は、地方総督のガリオが、彼らの訴えを宗教的な問題ということで退けましたが、それでユダヤ人たちの気持ちが治まるはずがありません。彼らはパウロを襲う機会を狙っていたのです。

ということで、パウロにとっては、遠回りする形になりましたが、彼はマケドニヤに戻り、ピリピから船出し、エーゲ海を渡り、トロアスを渡ることになります。そこから、さらに陸路や船を乗り継ぐことで、エルサレムへと向かうのです。ちなみに4-5節に、7人の人の名が記されていますが、彼らは、それぞれの教会が立てた代表者たちで、エルサレムの聖徒たちのために集めた献金を届けさせるため、パウロに同行した人々でした。また、5節を見て下さい。そこには「私たち」とありますが、それはここ（ピリピ）から、この手紙の著者ルカが再びパウロに合流したことを意味しています。

彼らは一旦、別行動を取りますが、トロアスで合流します。そして、七日間そこで滞在し、そのの兄弟たちと交わりを持つのです。7節「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。そのときパウロは、翌日出発することにしていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた」。この週の初めの日とは、日曜日のことですが、初代教会は、十字架の死後、主イエスが三日目、つまり、日曜の朝によみがえられたことを記念し、安息日の土曜ではなく、日曜に集まり、パンを裂くことをしていました。「パンを裂く」とは、食事をすることだけではなく、主の晩餐にあずかることも意味していたので、彼らは、そのようにして主のなされた十字架の贖いのわざにより、彼を救い主と信じる信仰によって、主と一つにされていることを覚えたのです。

この時の集会は、夜中まで続いたとあります。それは、パウロが翌日出発することにしていただけからですが、11節では、それは「明け方まで」続いたと記されています。パウロの話は、普段から長かったと思います。でも、なぜこの時は、明け方まで語り続けたのでしょうか？ 次の箇所（17節以降）からわかること、それは、パウロのうちで、トロアスの人々と会うのが、これで最後という気持ちがあったからだだと思います。というのも、この後、パウロはミレトに行き、そこにエペソの長老たちを招くのですが、その時パウロは、彼らが自分の顔を見るのは、これで最後だと語るのです。つまり、「これが最後」という思いから、パウロは、トロアスの人々に、主のみことばを夜中まで語り続けました。

でも、そこで人々が忘れられない出来事が起こります。9 節「ユテコというひとりの青年が窓のところに腰を掛けていたが、ひどく眠けがさし、パウロの話が長く続くので、とうとう眠り込んでしまって、三階から下に落ちた。抱き起こしてみると、もう死んでいた」。居眠りをして、窓から落ちて死んでしまったなんて、なんとも愚かな話のようですが、でも実際にその場にいたら、決して笑いごとではありません。死因がどうであれ、ひとりの人が、死んでしまったからです。

この青年ユテコは、なぜ窓のところに腰をかけていたのか？人が大ぜいで、そこしか座るところがなかったからか、それとも彼自身がそこに座りたかったからか、実際のところはわかりません。いずれにしろ、彼はそこに座ってしまったのです。そして、パウロの話聞くうちに、気持ちよくなって眠りに落ちてしまいました。おそらく、そこにたくさんのともしびがあったのも、眠気を助長したのでしょう。そのようにして、彼はバランスを崩し、三階から落ちて、息を引き取りました。実に悲しい出来事です。

でも、感謝なことに、彼は生き返ります。死んでから、生き返るまでにどのくらいの時間が経過したかはわかりません。その書かれた調子からすると、そんなに時間はかかってなかったことでしょう。そうすると、もしかしたら、彼は死んでなかったのではないかと、彼の死を疑う人がいてもおかしくないと思います。10 節のパウロの言葉からしても、そのように受け取ることも可能です。彼は言いました。「心配することはない。まだいのちがあります」と。この「まだいのちがあります」というのが、微妙な表現です。

ところが、12 節を見て下さい。「人々は生き返った青年を家に連れて行き、ひとかたならず慰められた」。この「使徒の働き」は誰が書いたものですか？すでに見たように、それはルカです。彼は医者でした。ユテコの死を確認したのが、ルカであったかどうかは記されていません。でも、医者であるルカが、ユテコの死と、彼が生き返ったと書いているのですから、私たちはそれを真実と受け止めて良いのではないのでしょうか？

では、死んだはずのユテコは、どのようにして生き返ったのか？彼は勝手に自分で生き返ったのでしょうか？日本的に言うと、三途の川を渡ろうとした時、「いや、まだ死ねない。まだ若いし、ぼくには夢がある」と言って、彼はそこから帰ってきたんですか？生き返ったユテコに、死の経験聞いた人もおそらくいたことでしょう。私なら聞いたと思います。でも、どうですか？ユテコは、どのようにして生き返ったのでしょうか？

主イエスやペテロの時とは違い、ここでは、パウロが何をしたとか、何を語ったかなどは記されていません。ただ、ユテコが死んで、生き返るまでのことを記しているのは、10 節だけです。「パウロは降りて来て、彼の上に身をかがめ、彼を抱きかかえて、『心配することはない。まだいのちがあります』と言った」。深読みかも知れませんが、私は、ここで「パウロがユテコの上に身をかがめた」というところに、ユテコを死から生き返らせた何かを見ます。というのも、もしパウロがユテコを抱きかかえただけならば、「彼の上に身をかがめ」という細かい表現を入れる必要はなかったと思うからです。

死者が生き返ったという出来事は、旧約聖書にも記されていますが、1 列王 17 章には、エリヤが、やもめの息子を生き返らせたことが記されています。その際に、彼は、その息子の上に身を伏せるのです。1 列王 17:21-22「そして、彼は三度、その子の上に身を伏せて、【主】に祈って言った。『私の神、【主】よ。どうか、この子のいのちをこの子のうちに返してください。』22 【主】はエリヤの願いを聞かれたので、子どものいのちはその子のうちに返り、その子は生き返った」。

パウロが、ユテコの上に身をかがめたのと、エリヤが、その息子の上に身を伏せたこととは、全く同じ表現ではありません。エリヤはこの時、三度それをした上で、主に祈ったとあります。でも、ユテコの場合は、パウロが三度、彼の上に身をかがめたとか、主に祈ったということは記されていません。ですから、そこから神様がパウロを通して彼を生き返らせたのではない、と結論付けることもできるでしょう。でも、それならいったい誰が、どんな力をもってユテコを生き返らせたのか？そんなことをできる人が皆さんの中にいますか？

死んだ者を生き返らすことができるのは、ご自身が、よみがえりであり、永遠のいのちである主イエスだけです。ユテコは、不注意のために窓から落ちたといえるでしょう。でも彼は、パウロを通して主が語っておられ

るところに、人々とともにいました。それは彼のうちに主への信仰があったからです。そんな彼を、また彼のまわりにいたトロアスの人々をあわれむことで、主は、彼にいのちを返されました。それによって、人々がみな、ひとかたならず慰められるため、その主からの慰めによって、彼らがさらに主に近づけられるためです。

12節にある、この「ひとかたならず」とは、あまり使わない表現だと思います。「普通ではない」といった意味ですが、新共同では「大いに」と訳されています。つまり、死因がどうであれ、死んでしまったユテコが生き返ったことを通して、人々は大いに慰められたのです。その慰めは、もちろん、ユテコが生き返ったこと自体に対するものですが、でも、そのことを通して、彼らは主がいかにあわれみ深いお方か、また力あるお方かを知れる、という本当の慰めを得たと私は思います。

皆さん、死者が生き返ることは大きな慰めです。でも、ここで生き返ったユテコにしても、主イエスやペテロによって死からよみがえらされた人々であっても、彼らは、再び死を迎えたのです。ただ、主イエスに出会い、彼を救い主と信じた後の死は、主を知る前までの死とはそのもつ意味が全く違っていました。なぜなら、主は、ご自分を信じる者にこう約束しておられるからです。ヨハ 11:25-26「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。…』」。

主イエスは、ご自分がよみがえりであり、いのちそのものだと言われました。それゆえに、主を信じる者にとって肉体的死は、何の力をもたないのです。永遠のいのちである主イエスをもっている者はみな、罪とその結果である永遠の滅びから解放されている、救われているからです。ですから、もはや肉体的死は、永遠に至るための途中経過に過ぎず、主イエスを信じる者を支配することはありません。これこそ、主が私たちに約束して下さっている大なる慰めです。もちろん、愛する者が、死を迎えた後に、生き返ることは普通では味わえない慰めとなることでしょう。病に苦しむ人が、癒されることも間違いなく大きな慰めとなります。

でも、それらは私たちが、主に近づけられるため、そのことを通して主の御名をあがめるようになるためのものであって、私たち側の都合や、自分自身を誇るためのものではありません。そのような間違った動機で主から奇蹟を求めるなら、このような慰めの出来事でさえ、私たちが主に近づけるのではなく、遠ざけるものになってしまうのです。でも、主イエスは、ご自身が慰めに満ちておられるゆえに、ご自分に近づく人を慰めて下さいます。その慰めの形は、その時々で違ってきますが、でも、主を求める者は、必ず慰めを受けるのです。

そのためにこそ、主は十字架の苦しみを耐え忍ぶことで、ご自身のいのちをもって、私たちが罪と死から救って下さったからです。彼を信じるすべての者が、この世での一時的な慰めでなく、神様だけが与えることのできる永遠に至る慰めを受けて下さるためです。主は、それが真実（本物）であることを、ご自身のよみがえりをもって証されました。「復活なんてない」という人には馬鹿げた話でしょう。でも、主と主のことばを信じる者には、主の復活こそ、この世を超えて、永遠に続く天国を私たちに約束してくれるものです。今の時どんな困難があったとしても、私たちが希望を失うことのない理由はここにあります。

黙 21:1-4「また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。3 そのとき私は、御座から出る大きな声がかう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』」。